

東京都スクールカウンセラー（公認心理師／臨床心理士）

金屋光彦

# 家庭崩壊の真相

## — 子どもたちの自己肯定感を考える その7 —

### 1 家族は一つのまとまりを持ったシステム

人が病気になると、種々の症状が出る。家族も病むと、弱い部分が問題行動という症状を出す。通常それは子どもである。その子の問題行動は家族病理の結果であり、家族システムを維持するための必要悪になっていることが多い。この家族病理の症状を代表して出す人を、臨床心理ではIP (Identified Patient)と呼ぶ。

家族は、問題行動を起こした子どもを「困った子だ」として、その改善を試みる。しかし、その子の問題行動は、家族関係の力動の歪から生じているので、その試みは対症療法に過ぎない。一時的に問題行動が消えても、また同じような新たな問題行動が生じることになる。そういう悪循環を繰り返すうちに病理が深まり、家庭崩壊が一挙に進むことがある。

### 2 金属バット殺人事件とその家族

1980年11月29日の深夜、川崎市に住む予備校生I・N(当時20歳)が、就寝中の両親を金属バットで撲殺した。頭はぱっくりと割れ、血が天井まで吹き飛び、現場は凄惨を極めたという。非行歴の全くない従順で礼儀正しい予備校生による裕福なエリート家庭に起こった凶悪事件は、当時の全国を震撼させた。

彼の家族は両親に4歳上の兄の4人家族。東大卒の父は、当時旭硝子の支店長、兄も早大卒で日立製作所に勤務していた。彼も当然のように有名大への進学を期待された。3人の家庭教師がついた中3時代を経て、早稲田を目指し2浪中だった。だが、成績は伸びず次第に予備校へも行かず引きこもりがちになる。兄に比べできの悪い彼を、父親はたびたび「お前はクズだ」とののしった。専業主婦の母親はそんな彼をかばい世話を焼き、「ママ」「Nちゃん」と呼び合う仲良しだった。ある時野球好きの彼が、幼友達がコックになると聞いて「うらやましいなあ」と語ったという。また、母親には自衛隊員か力士になりたいと言ったこともあった。

### 3 I・Nの犯行前日までの実情

2浪しても成績不振から抜け出せないI・Nは、苦しさから次第に現実逃避が目立っていく。まず酒浸りになる。親の財布からキャッシュカードを抜きとり、ウイスキーを買い、自室でこっそり飲んだ。また、部屋から勉強本が消え、月刊プレイボーイ等の男性誌がそれに代わった。予備校へは行かず、パチンコや映画館、本屋での長時間の立ち読みで時間をつぶした。極めつけの良い子だった彼の浪人生活は、完全に行き詰まってしまう。ここにきて彼の自己肯定感も底をついていたであろう。

### 4 夫婦関係の実情

殺害された東大卒の父親(48歳)と専業主婦の母親

(46歳)は、郷里が同じ山口県。母親は江戸時代から続く名門酒造家の5人姉妹の次女。二人は見合結婚後、養子縁組をする。家庭では夫が妻に靴下まで履かせる亭主関白。高額な給与から妻には生活費だけ渡し、あとは自分で自由に管理し使っていたという。

二人の仲は事件2年前から悪化し、寝室も別になる。きっかけはI・Nの受験失敗だった。「お前の頭が悪いからだ」と夫が妻を責めた。十分な生活費も渡されず、妻は豚肉の細切れしか買えなくなる。それを見た知人は「裕福なはずなのに、質素なのかお金がないのか」と首をかしげたという。またこの頃から、夫は小料理屋に足しげく通った。妻の目の前で電話しその女主人とデートの約束をした。「俺に女がいるんだ」という妻への嫌がらせだった。夫婦間葛藤は頂点に達していた。

### 5 犯行前日の小事件

11月28日深夜、I・Nは酔って帰った父親に叱られる。財布から抜き取ったキャッシュカードで1万円を引き出したことがバレたのだ。食堂でも、母親に同様の注意をされる。いつもかばってくれる母親がこの時ばかりは違っていた。彼はひどいショックを受けた。母にも裏切られ孤立感が極まった彼は、自室でウイスキーをあおる。そこへ再び現れたのが父親だった。「おまえ酒まで飲んでたのか！ うちに泥棒を飼っておくわけにはいかない。明日すぐ出ていけ。お前はクズだ」と脇腹を思い切り蹴られ椅子ごと転げ落ちた。そしてこの2時間後、彼は金属バットを振り下ろすのである。それは、20年間親にがんじがらめにされてきた良い子が、初めて自己主張をした瞬間でもあったと言えるだろう。

### 6 事件を防ぐ手立ては何だったのか？

I・Nは自らの手で両親を亡き者とした。それによって夫婦間葛藤も親子の軋轢もなくなり、家庭も崩壊した。犯行後「大好きな母親をなぜ殺したのかわからない」とI・Nは語ったという。

彼が壊したかったものは、家庭でも親でもなかったはずだ。壊したかったのは、彼自身を押し殺し、勉強に縛り付ける偏差値神話だったのであろう。有名大学から大企業というルールに乗れという生き方の呪縛、それを一挙に振りほどきたかった一撃が金属バットだった。

この一撃の前に、もし両親自らが解放してあげれば、事件は防げただろう。病理の核心は、彼の問題行動ではなく、両親の狭く硬直した価値観にあった。だが、この解放作業を共に行うには、夫婦関係があまりにも冷え切ってしまったもいたのだった。